

マリア

夏の訪れを予感させる雲と海風が
あなたが握りつぶそうとしている思い出を再び息づかせる
絶望的なまでに磨耗し、擦り切れ、怯え切った自己
僕はただ道化師となるほかはなく
ひたひたと砂浜をなめる海水のようにつかず離れず——

その眼差しは、ひたすら合わせ鏡の奥へと吸い込まれてゆく
一つ目の像の歪みは、二つ目の像の歪みへと
二つ目の像の歪みは、更に三つ目の像の歪みへと
そして更に四つ目の像の歪みへと
次々と譲り渡されてゆく

体験の届かぬ理知
感覚を拒否した数列
そのような干からびた創造に狂わされ
置いてきぼりにされた痛みを取り込み宿すこと——
あなたを置き去りにした者たちの「未来」というもの・・・

夢魔に取り憑かれたアルゴリズム
権威主義の旗に引き寄せられる論理
それらがあなたにとっての精子となり
あなたは孤独の中で受胎を繰り返す
呻き、悶え、産み続けることを強られる

(そこからあなたを力づくで引きずり出すことが
果たして適切な友情と言えるのであろうか)

鏡のような冷え冷えとした雲が拡がってゆく
それに吸い寄せられるようにざわめく波頭

その中でまたひとり生まれ出る者——
僕はそれを育て上げねばならない
受胎と分娩のみに狂うあなたの傍で・・・

(2009.9.21)